

〔研究ノート〕

## 造形表現教育の共同制作課題による チームコミュニケーション向上のための試み

大 溝 文 清<sup>1)</sup> 豊 川 好 司<sup>2)</sup>

### 要 旨

造形表現活動の「共同制作」では、多様な個性の価値観や能力を統合し、作品を創作する学習であり、学生相互の表現能力の認識や比較、受容等が有機的なコミュニケーションの基に実施できるよう計画した。課題設定から完成までの一連の過程は、学生自身が制作段階毎に、制作手順と技法を具体的に考察し、分析及び実施、次段階の予測と準備を共有し実践できるようにした。その結果、①1班7名による3チームは、それぞれステンシル技法により、原図を約4倍に拡大し作品を完成させた。②等分割手法の共同制作は全履修生を満足させ、チームにおける個人の自主性と協調性を養うことができると考えられる。③美術の共同制作は各自がチームを運営する意義を自覚し、大きな成果を上げる可能性を教育できることが示唆され、看護や医療の現場において、必然的なチームコミュニケーション能力、治療者に対する的確な判断と冷静に対応できる能力を育てられると考えられる。

キーワード：造形表現活動、コミュニケーション能力、共同制作授業

### I. はじめに

造形表現活動における共同制作への取組は、昭和42年に遡るが、主として平成16年度から20年度まで、弘前ホスピタリティーアカデミー言語聴覚学科1学年を対象に、連続し集中的に実践してきた。各年度のテーマは、16・17年度は解剖図。18年度は青森県立美術館開館を記念して、アレコの背景画「サントペテルグルグの幻想」。19年度はボッティチェリの「ビーナス誕生」。20年度はラファエロの「小椅子の聖母」である。これらの授業では、対象物を良く観察し、正確に再現する能力の育成を目標に実践した。いずれの課題も、個人毎の作品をタイルを敷き詰めるようにして、一画面を完成させる手法である。各人の能力に応じた作品が並列されることから、作品としての一体感はある程度減じられる。しかし、共同で作品を完成する喜びと達成感は得られたと考察している。しかし、完成度をより引き上げ、統一感と満足度を得させるには、この手法では限界がある。新課題では、

学生の造形的体験を多く得させることを目標に、学習への抵抗感を減じ、課題目標を低位に設定し、容易に取組める手法を導入した。また、共同制作を行なうことで、必然的に相互協力の重要性を認識させつつ制作させることで、達成感や連帯感が得られるようにした。

本研究では、地域に根ざした多様な作品内容を持つ、郷土の作家「棟方志功」を取上げ、無作為に抽出された人員でチームを編成し、制作させることにした。多様な表現能力を持つ学生が造形的知識の共有と相互の能力の比較と受容をはかり、チームコミュニケーションを通して作品を完成させることで、将来の職場で遭遇されるであろう人間関係構築には欠かせない、コミュニケーション能力の重要性を意識させることに重点を置いた。また、この学習では、教具を自主製作させることで、生活改善に役立て活用する能力の育成も目的の一つとした。なお、棟方志功の版画作品を、共同制作を導入してステンシル技法で拡大再現させる授業は、我が国初の試みであると推察している。

1) 学校法人弘前城東学園 弘前医療福祉大学短期大学部 (青森県弘前市小比内3丁目18-1)

2) 学校法人弘前城東学園 弘前医療福祉大学 (青森県弘前市小比内3丁目18-1)

## Ⅱ. 課題と授業計画

造形表現活動の共同制作では、造形活動と言語を介するコミュニケーションとの相乗効果により、相互理解と共感を深めて、授業をより効果的に演出できる面をもっている。本課題の題材の取上げ方、授業形態、自作教具の開発、授業実践方法などは、前例がないため、授業者は事前に実作品の制作を行ない、授業の導入から完成に至るまでの一連の作業の分析と効果について実証し、それにより、制作内容や留意点、教材や授業法等を盛り込んだ工程表を作成し、授業展開並びに使用教材を実施順に以下の(1)～(9)のように配列し、学生に教示した。

題材の棟方志功「二菩薩釈迦十大弟子」の全12図のうち、初年度はこの中の3図を制作し、次年度以降のペースメーカーの作品制作を目標にさせることで、作品の完成度を高めるよう指導した。これは、3作品の完成度が、今後の授業に大きく影響することからである。自分達の作品が、後輩達へのメッセージとして受け継がれることを強く意識させることを意図した。なお、全12図の完成は3カ年計画で達成されることを伝えた。

本課題の使用教材は以下のようであった。

- (1) 共同制作原画：棟方志功「二菩薩釈迦十大弟子」<sup>1)</sup>  
普賢菩薩、須菩提、富樓那弥多羅尼の3作品とし、1原図を14分割後、部分毎に拡大再構成し、下図原画を制作する。  
著作権：財団法人棟方板画美術館所蔵(平成21年11月26日付け使用許可取得。作品展示時に、題名・所蔵美術館名を明示)
- (2) 教材原画寸法：W165mm×H390mm(印刷物原稿)
- (3) 下図寸法(天地なし)：A3(タテ)3枚
- (4) 製作拡大図実寸(天地なし)：W844mm×H2,079mm
- (5) 完成作品寸法(天地含む)：W840mm×H2,800mm
- (6) 技法：ステンシル技法(型紙不使用。墨汁による叩きぼかし)
- (7) 表現素材：ロール和紙、自作スポンジブラシ、丸筆、墨汁
- (8) 班編成：1班7名×3班編成
- (9) 制作期間：平成21年12月14日～平成22年2月15日。  
90分×8コマ=12時間

授業概要と指導内容は以下のようであった。

### 1回目、平成21年12月14日(月)90分

課題設定理由、授業概略、棟方志功の人生や作品について説明。

- (1) 課題設定理由、制作目標および作業概要について、実物大完成作品(文殊菩薩像)を提示し、課題内容のアウトラインを把握できるようにした。

- (2) 棟方志功と板画「二菩薩釈迦十大弟子」について、配付資料や画集等<sup>2)</sup>により作品紹介とその時代性・作家の環境等<sup>3)</sup>について紹介した。

### 2回目、平成22年1月18日(月)90分

仏像について、釈迦・如来・菩薩についての学習。

- (1) 釈迦と菩薩<sup>4)</sup>について、配付資料で仏像の図像<sup>5)</sup>の解説を行ない、仏像の概略を説明し、日本の文化に親しみ、文化財を愛護する心が育つように意図した。
- (2) 著作権や知的財産保護について、本課題の許可書の複製を配付し、知的財産の実際について学習した。

### 3回目、平成22年1月18日(月)90分

班編成の意図とその方法。下図の制作方法と注意点について解説後拡大図制作開始。

- (1) 班編成方針と制作手順の解説後、チームによる自主的活動を基本とし、共同体の一員としてのチームコミュニケーションの意義とそのあり方を説明した。
- (2) 図1の配付資料と原図を示し、グリッドによる拡大法と座標の取り方を板書により補足解説した。作業手順や絵画における空間認識の基本事項の実例を提示し、制作内容の確認と基本事項を共有させた。
- (3) 資料により画面の分割・拡大および相似形の制作について詳しく解説後、授業時間内制作目標を確認し、机間巡視によりチーム毎の個別指導を実施した。生活の基礎知識として、図1の紙の規格と $\sqrt{2}$ 矩形、図法(相似形)黄金分割・等分画法<sup>6)</sup>について説明し、生活とJIS規格等の理解を深め、拡大の原理と方法を実生活に応用できるようにした。

### 4回目、平成22年1月25日(月)90分

拡大図制作。机間巡視によりチームコミュニケーションの再確認と個別指導を実施。

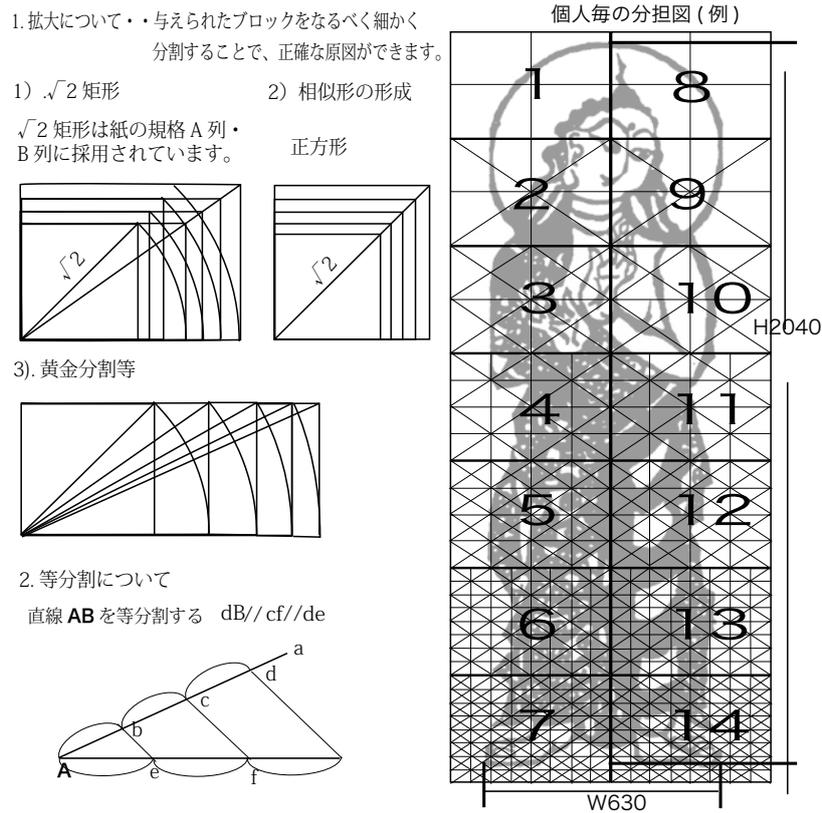
- (1) 正確な作図が作品精度を高めることを理解させ、相互にコミュニケーションを図り、班として画面の統一感を保つようにした。

### 5回目、平成22年1月25日(月)90分

拡大図完成。各自の下図を統合し、修正と誤作業防止の作業を実施。自作教具制作およびステンシル基礎技法の習得後本制作開始。

- (1) 各自の拡大図完成後、14枚の拡大図を統合・修正作業を経て下図原画を完成させた。誤作業防止のため、ステンシル部分をハッチングにより視認度を高めさせた。また本制作進行をスムーズに行うために、制作タイミングの同調と相互の綿密なコミュニケーションの必要性を助言した。

図1 原画拡大法、等分割法について



- (2) トレース時に、棟方志功の作品再現に欠かせない版画の特徴とその基本技法を再確認させ、再現性が向上するよう指導した。
- (3) ステンシル表現と版画表現との相違について予備的演習を実施し、その特徴と表現の可能性に着目させ、版画的表現に応用する際の注意点について指導した。
- (4) 共同制作を通してステンシルの技法を習得させ、作品再現の基本事項の確認と実生活での応用例を紹介し、将来の生活に活用できる基礎とした。

**6回目、平成22年2月1日(月) 90分**

ステンシル技法による制作。授業終了後制作途中の作品を掲示。

- (1) 実作品制作時には、授業者が各時間毎に制作進行上のチェックポイントに従い、授業参加態度等の授業記録を作成した。学生の行動観察を通して、班毎の制作が順調に推移できるように指導した。また、次時の授業内容と準備、および完成までの制作手順を再確認するよう指示した。
- (2) 各授業終了毎に、制作中の作品を展示し、制作状況や表現技法等が工程表通りに実施されているかを、確認する習慣付けを行なった。制作途中の作品掲示は、他チームからの作品評価が得られることや、履

修生以外の学生への授業内容の紹介も兼ね、学生の制作意欲を高める場として活用した。

**7回目、平成22年2月8日(月) 90分**

ステンシル技法による制作。授業終了後制作途中の作品を掲示。

- (1) 前時と同様の目標で、机間巡視を中心に指導した。

**8回目、平成22年2月15日(月) 90分**

作品完成。作品展示と鑑賞会実施。記念写真撮影。自作アンケート用紙配布。

- (1) 完成作品を前に作品鑑賞会と記念写真撮影を実施した。完成作品を前に制作中のエピソードや達成感、成就感を共有できる場として活用した。学生の生の声は、次年度の授業実施に最も必要な参考資料として記録した。
- (2) 「美術と生活」教科独自のアンケートを配布、学生の生の声を集約し、授業実施の反省と改善点のための資料を作成し、次年度授業計画考察の基礎資料とした。
- (3) 完成作品を学生ロビーに展示し、学内鑑賞会を実施し、履修生以外の学生の反応を直接収集する場とした。

### Ⅲ. 研究方法

#### 1 調査方法

教養基礎科目の「美術と生活」の履修生に以下のアンケート用紙を配布し、課題終了時に、記入させ提出させた。アンケート内容は、表1のように、本授業に対する評価を行ない、さらに授業に関する感想を自由記述とした。本授業の評価については、郷土作家の理解度、基礎技術等作品制作に関する事項、コミュニケーションに関する事項、達成度に関する自己評価に関する事項、学習全体に関する事項等詳しく12項目を設問した。なお、アンケートは本学の倫理的配慮をして実施された。

#### 2 調査対象者

「美術と生活」1学年の履修生21名である。回答者19名。

看護科5名(女子4名、男子1名)。作業療法専攻16名(女子9名、男子7名)

#### 3 アンケート調査の配付、回収方法、調査年月日

授業開始時にアンケート実施を予告し、最終授業の終了時、平成22年2月15日にアンケート用紙を配付し、学生各自が指定のボックスへ提出。

#### 4 分析方法

質問項目に対し、「はい」、「まあまあ」、「いいえ」の3段階で評価し、100分比で表した。

### Ⅳ. 結果

授業に対するアンケートの結果は表1のようである。

①使用原画に関する関心は、「いいえ」が15.8%で約6分の1と少なく、「はい」31.6%、「まあまあ」52.6%とほとんどの学生が関心を持った題材であった。アンケート設問の②～⑥の共同作業のための手順、等分割方法、ステンシル技法、拡大方法等、制作に関する基礎知識の理解度については、「はい」73.7%～100%、「まあまあ」が0.0%～26.3%であり、これらの合計割合は、⑤の原図の「いいえ」10.5%以外において、全て100%であった。④、⑥のステンシルに関して「まあまあ」がそれぞれ15.8%、26.3%であり、ステンシルに関しては、理解と実技においてやや問題があったことが示唆された。アンケート⑦～⑩の制作に関する到達度および心理的設問では、「はい」の割合は73.7%～89.5%で、前記アンケート同様に高い割合であった。他は、「まあまあ」のみで、「いいえ」が皆無であった。⑪の生活への応用では、それぞれ「はい」52.6%、「まあまあ」42.1%、及び「いいえ」5.3%であった。「はい」が半数以上であり、「まあまあ」も高く、前2者で94.9%と1名を除いてほとんどの履修学生によって応用できると判断された。設問⑫の制作させた課題数については「いいえ」が89.4%であり、ほとんど問題なく行なわれたことが示され「いいえ」がほとんどの5.3%であるが、⑪の「いいえ」と対照された。

表1 平成21年度「美術と生活」授業に関するアンケートの回答率(%)

調 査 項 目	は い	まあまあ	いいえ
① 棟方志功について興味を持った	31.6	52.6	15.8
② 制作手順について理解できた	100.0	0.0	0.0
③ 等分割の基礎が理解できた	94.7	5.3	0.0
④ ステンシルについて理解できた	84.2	15.8	0.0
⑤ 原図の拡大が上手くできた	84.2	5.3	10.5
⑥ ステンシルの表現が上手くできた	73.7	26.3	0.0
⑦ 他人とのコミュニケーションが上手くできたか	73.7	26.3	0.0
⑧ 完成までは順調にできましたか	89.5	10.5	0.0
⑨ 共同制作について興味を持ったか	73.7	26.3	0.0
⑩ 自分の制作に満足しましたか	73.7	26.3	0.0
⑪ 等分割の基礎を生活に応用できますか	52.6	42.1	5.3
⑫ 課題数は多かったですか	5.3	10.5	89.4

授業への感想を求めた自由記述は15名が応え、次のようであった。楽しかった、または面白かった7名。先生がやさしく、授業が好きになった2名。この他は多々難しい事もあったが、それなりに楽しくできた。難しいと聞いていたけれど、自分のペースにちょうど良く、とても楽しかったので、毎年やりたい。美術はあまり好きではなかったが、授業を受けて、少し興味をもてるようになった。皆が楽しくやれるのが良かった。いろいろと作るのが楽しかった。他の授業とちがって、いろいろと生活に生かせるものが多かった。などであった。

美術について、今興味をもっている分野への自由記述では11名が応えた。版画、静物画、人物画、風景画と写真、ペーパークラフト、ステンシル・ちぎり絵、美術、など各1名、音楽2名であり、この他、片麻痺患者の利き手交換の作業で美術が行なえるかどうか、ステンシルの道具が簡単に作れることを知ったので、これからの生活にいかしていきたい。があった。

また、授業内での調査では、高等学校での芸術科目の履修状況は、音楽47.3%、書道31.6%、および美術は21.1%であり、美術の履修率は低く、ほとんどの学生が中学校の美術教育の段階で終了していることが判明した。

## V. 考 察

美術は自己の美に関する感性を表現する手段ではあるが、本授業研究のねらいは、学生に造形表現の楽しさを体験させ、将来の生活、とりわけ医療関係の職場への活用の可能性を検証しようとした。すなわち、本共同制作の授業が、異なる職種の医療技術者とのコミュニケーションを基盤としたチーム医療体制で進められる現代医療への訓練的学習となることを想定し、長時間を要する大型作品を1チーム7人の相互協力により解決する題材とした。本授業に対する学生の感想を求めた自由記述に15名が応えたが、ほとんどがこの「美術と生活」の授業に対し好評であった。一方、美術について、今興味を持っていることについての質問には、約半数の9名が版画や写真等8分野をあげた。以上のように、本授業を履修した学生は、必ずしもすべてが美術分野に、特に関心が高いことはないと思われた。しかし、アンケート結果によると、授業の最初に説明された共同制作の、何を、何のために、どのように行なうかは理解され、その結果として、1チーム7人が各自の役割を自覚することで、ほとんど全員が満足できた作品を完成させたことが示された。一つの目標に対しチームで取組むためには、指導的立場の者はきめ細かにその対処について説明し、理解させることの重要なことが示唆されていると考えられた。共同制作は互いにコミュニケーションを図りながら、計

画的に手順を決めて制作することが求められるが、これらのことを取りまとめるリーダーが自主的に選出されたことも好結果へ繋がっていると考えられる。また、全員が共同制作に興味を持ったことは、7人がチームの一員としての位置と役割を得たことを現しており、各自がチームを運営する意識を自覚したことを示していよう。

この課題の技術上の主点は、ステンシル技法を基本に、手作業で下絵を原図の約400%に拡大することから始まる。完成作品実寸がW840mm H2,800mm×の大型作品であり、下絵の作成は精緻さが要求される。粗雑な作業では各自の制作した拡大図の統合時に、誤差が生じ修正を余儀なくされるからである。学生には初めての体験であったが、完成作品への高い満足度からは、ステンシル技法の理解と実践が相互にコミュニケーションを図りながら、仲間の出来不出来を受け入れ、歩調を合わせて作業が進められ、チーム全体の流れを見ながら作品を完成させたことを表している。授業に設定された幾つかの教材については、授業者がステンシル技法の手順などについて実践的に教授、指導したことも、本技法の基本が理解され、学生自身がより主体的に共同制作に参加でき、特に問題を招くことはなく、満足できた作品を完成させたと考えられた。履修生のほとんどは完成作品を前にして、満足できなかった学生は皆無であり、また、全員が本共同制作について興味をもったことが示されており、完成された作品への高い満足度がチームにおける個人の自主性とチームの協調性が養われた授業になったことが考察された。

履修生の言動からは、作品が次年度の見本として展示できる完成度とみなしていることが伺われた。等分割の手法の今後の活用については、学生のほとんどにとっては難しいことではなく、応用できるとみなされた。将来の看護・医療関係の職場において、活用できる技術的能力の一端を実感したと考えられ、治療のステージにおいて、自分の演出でこの手法を生かせる可能性が示唆された。

作品は他者の鑑賞により共感や批評等を経ることで、初めて作品として認知されることから、学生の労作を単に授業内での制作物としてではなく、学園の財産として考え、作品を公開することにした。

## VI. 謝 辞

本教材の使用にあたり、財団法人棟方板画美術館の著作権使用許可に、深謝します。

(受理日 2011年2月21日)

## 引用文献

- 1) 馬場一郎他：別冊太陽 棟方志功SUMMER' 74 .平凡社 .P16-17.1974.
- 2) 柳宗悦：棟方志功板画 .図版 40-45.筑摩書房 .1968.
- 3) 馬場一郎他：別冊太陽 棟方志功SUMMER' 74. 平凡社 .P44-85.1974.
- 4) 藪中五百樹他：歴史とのふれあい 仏像 鑑賞の手引 .株式会社フジタ .P10-42.1990.
- 5) 倉田文作：仏像のみかた 技法と表現 .第一法規 .P72-74.1969.
- 6) 田中正明他：デザイン技法講座 4.美術出版社 .P33-36.1984.

## 参考文献

青森県立郷土館：青森県近代日本画のあゆみ展 .青森県郷土館 .1998.

青森県立郷土館：特別企画青森県近代洋画のあゆみ展 .青森県博物館等協議会 .1990.

青森県立郷土館：日本近代銅版画と今純三展 .青森県郷

土館 .1992.

山川みどり：芸術新潮 特集やさしい仏像の見方 .新潮社 .1983-3.

佐藤柳逸：心を耕す 美術教育 .北方新社 .1998.

新川昭一：これからの美術の指導 1 絵画・彫刻 .明治図書 .1988.

高橋正人：構成 視覚造形の基礎 2 .鳳山社 .1974.

塚田敢他：デザイン教育体系第 2 巻 基礎デザイン 平面 .誠信書房 .1967.

日文美術教育資料：私たちの美術教材ノート デザイン・彫塑・工芸 .日本文教出版株式会社 .1987.

ひろさちや：仏教とキリスト教 —どう違うか 50 の Q&A 一 .新潮選書 .新潮社 .1986.

堀徳郎：青森県高等学校教育研究会 研究紀要 第 13 集 .青森県高等学校教育研究会 .1969.

宮協理監：新版美術教育の基礎知識 .建帛社 .1991.

棟方志功記念館：ようこそ棟方志功記念館へ .棟方志功記念館 .1975.

文部省：高等学校学習指導要領解説 芸術編 .東洋館出版社 .1972.

---

## A trial for team communication improvement project utilizing a collaborative production of plastic expression education

Fumikiyo Ohmizo<sup>1)</sup> Koji Toyokawa<sup>2)</sup>

- 1) Faculty of Health Science, Hirosaki University of Health and Welfare Junior College  
(3-18-1 Sanpinai Hirosaki, Aomori 036-8102 Japan)
- 2) Faculty of Health Science, Hirosaki University of Health and Welfare  
(3-18-1 Sanpinai Hirosaki, Aomori 036-8102 Japan)

### Abstract

Plastic expression “collaborative production” activities help facilitate a convergence of the abilities and the values of a diverse group of participants. The focus of this study was on a learning activity in which the participants created a work of art. This activity was planned to enable participating students to compare and be cognitive of their expressive abilities

At each stage of the process, which was a series of events that began by establishing a theme and ended with the completion of the project, students themselves thought about the order in which the making of the artwork would proceed and the techniques that were to be used. Then, as a group, they put this analytical plan into action, while at the same time anticipating and preparing for what would happen at the next stage of the project.

Results: ① 3 teams of 7 students each completed a work of art using a stencil technique and magnifying the original drawing fourfold. ② The “division method” of group work satisfied all of the enrollees and successfully fostered both individual independence and cooperation within each of the groups. ③ Group production of the artwork contributed to a heightened sense of individual independence as well as group cooperation. These positive results suggest further possibilities for pedagogical applications

For those working in the fields of nursing and medicine, the ability to engage in team communication is of the utmost importance, and nurturing this ability will enable them to better handle those in their care by exercising calm and accurate judgments.

Key words: Plastic expression, communication, fundamental knowledge on life.